

保健体育教師が総合的な学習の時間の 教材研究から学ぶこと

— 中学校で「環境」を主題とした教材と保健体育教師像の対比から —

阿部直紀¹⁾・合田大輔²⁾・松田 広¹⁾

1) 福山平成大学 (福祉健康学部健康スポーツ科学科)

2) 広島大学附属福山中・高等学校

E-mail : nafeb24@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本研究は保健体育教師が中学校の総合的な学習の時間の授業実践に関わることで、教師として教材理解が深まる可能性を明らかにすることを目的とした。

はじめに、モデルとして中学校の総合的な学習の時間の授業を設定した。そして、実践した学習内容と教科保健体育の学習内容との関連を整理した。そこから、保健体育教師の学びの過程を明らかにした。次に、従来、そしてこれからの保健体育教師像について、先行研究を視座として整理し、求められる保健体育教師像を整理した。最後に、中学校の総合的な学習の時間の授業実践から得られた保健体育教師の学びの過程と、求められる保健体育教師像を対比させ、保健体育教師として教材理解が深まる可能性の言及を行なった。

保健体育教師の学びの過程としては、保健体育から総合的な学習の時間へつなげる意味では総合的・多面的・複合的な理解が進むことが考えられた。反対に、総合的な学習の時間から保健体育では、発展的な学習へ授業構成を改善できることが考えられた。そして、それらが相互に往還するところに保健体育教師の学びの過程を見ることができた。続いて、求められる保健体育教師像では、ボトムアップ型の授業実践と保健体育科教育にイノベーションを起こすことが考えられた。そして、これからは教材理解と生徒理解の両方を深め、新たな学問的な視点を持ってより良い方向へ変革することが求められていることであると考えられた。すなわち、「学び続ける保健体育教師」という教師像が見えた。そして、保健体育教師が教材理解を深める可能性を考える上では、信念の概念 (朝倉・清水, 2014) を援用した。そこからは「支援者型」と「開放的信念型」の信念が核となり、「研究志向」と「生徒重視」の信念の変容によって保健体育教師の成長の可能性が見えた。加えて、保健体育教師の総合的な学習の時間による学びの過程からは「先導的実践の追求」の信念の変容による成長の可能性が考えられた。ゆえに、2つの対比から保健体育教師が総合的な学習の時間を実践することで、その教材研究から理論と実践を往還させ、学び続ける過程で教材理解を深める具体的なイメージを明らかにすることができた。

キーワード：保健体育 総合的な学習の時間 教師像 教材研究

1. 研究の背景

中学校の教育課程は各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動で編成されている。その中にある総合的な学習の時間は、平成10年の学習指導要領の改訂によって創設された。この授業では、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく生徒の姿をめざしている（文部科学省、2022）。しかし、この授業が始まった頃は、各学校で設定したテーマに基づいて学習内容を組み立て、指導するようにしたため、前例がない、教科書がない、評価が難しい等の理由から、指導が難しい等の声が上がった。ゆえに、総合的な学習の時間は特別活動の時間と兼ね合わせながら行われることが多い状況が続いた（大友、2019）。このことから、総合的な学習の時間は各学校で独自に学習内容を設定して授業を実施しており、各教科の学習内容よりも学習目標や学習内容の設定に難しさがうかがえる。したがって、総合的な学習の時間に取り組む教師は、自らの足で教材を開発し、自らの手と頭で指導計画を作成し、授業を生み出していくことが求められる（文部科学省、2022）。ゆえに、現場の教師は学習課題の設定から学習内容の検討と資料作成、そして評価規準の策定に至るまでの全てにおいて独創性を発揮したカリキュラムを作成し、実践することが求められているのである。

中学校では主に教科担任制で学習活動が行われており、各教科の授業は専科の教師が行う。一方で、総合的な学習の時間は道徳や特別活動と並んだ位置づけとなっており、専科の教師による授業ではない。ゆえに、そのカリキュラムは学校全体で計画、実践を行う必要がある。現場の教師にとっての総合的な学習の時間は、地域や学校、生徒の実態や特色に応じてカリキュラムを編成し、実施、改善していくカリキュラム・マネジメントの力が必要であることに加えて、複数の教師がチームを組んで指導にあたることも多く見られ、教師自身の学ぶ姿勢が身につくとしている（文部科学省、2022）。このことも踏まえて、教師自身の学びを転換し、個別最適な学びや、協働的な学びの充実を通じた主体的・対話的で深い学びを実現するための「新たな教師の学びの姿」の提言がなされた（中央教育審議会、2022）。これらからも、中央教育審議会（2021）が示した教職生涯を通じて学び続けることや、教師が創造的で魅力ある仕事であることを再認識するために、総合的な学習の時間から教

師が学ぶことは多いのではないだろうか。

これまでの総合的な学習の時間の研究成果を概観すると、その教材開発や学習内容についての実践研究が大半を占めている印象である。また、総合的な学習の時間と教師教育を関連させている研究では、大学教育における教職課程の指導法についての研究が比較的多く散見される。一方で、現場の教師が総合的な学習の時間によってどのように成長したか、言い換えると総合的な学習における教師の学びについて明らかにしている研究は散見されない。そのような中で、川村（2007）は総合的な学習の時間で求められる教師の役割の1つに、同僚等と協働することをあげている。とりわけ、中学校教師の場合は校内研修を積極的に行える学校組織であり、実践を同僚に対して公開して検討し合うことが重要であるとしている。また、木原ら（2005）は総合的な学習の時間のカリキュラム開発においては教師間の共同が促進されなければならないとしている。そして、カリキュラム・コーディネーターが果たす役割が大きいとして、彼らの力量形成をめざした学習プログラムの開発を行っている。これらの報告からは、総合的な学習の時間のカリキュラム開発や授業実践を行う上では教師間の同僚性が発揮される必要があることと、その中でリーダーシップを発揮してまとめる教師の存在が大きいことがわかる。したがって、教科担任制で各教科の授業が行われている中学校において、学校全体で教科をまたいだ総合的な学習の時間のカリキュラム開発や実践を行うことが大切であることがうかがえる。そして、その取り組みによって、後の各教科の授業実践にも活かすことができる教師の学びへと発展するのではないだろうか。

そこで、本稿では保健体育教師に着目をして、総合的な学習の時間への関わりと教師の学びを明らかにしていきたい。文部科学省（2017）は総合的な学習の時間の目標を実現するふさわしい探究課題として、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の将来に関する課題などを踏まえて設定することとしている。以上に挙げられている中で、保健体育科での学習内容で取り扱っているのは環境と福祉・健康の課題である。実際に、三宅（2012）は総合的な学習の時間で環境についての課題を取り上げ、保健体育科と理科、家庭科と共に実践を行い、その成果を中学校保健分野の発展的学習へと還元をする取り組みを行っている。また、合田

(2019)は同じく環境についての課題において、「内的環境」として味覚の学習を取り入れた。そして、保健分野での発展的な学習を見据えて、保健分野と総合的な学習の時間とのつながりについて整理をしている。いずれの報告についても、総合的な学習と保健体育科の学習を相互に関連させ、発展的な学習へ展開させていく実践報告である。これらからは、総合的な学習の時間の実践を通して得られた学びを、保健体育教師が自らの教科の学習へと活かしている事例であることがわかる。

これまでをまとめると、総合的な学習の時間は現場の教師が独創性を発揮したカリキュラムを作成し、実践することが求められている。そして、教科担任制で各教科の授業が行われている中学校において、総合的な学習の時間を学校全体で取り組むことで多くの教師の学びがあると考えられる。さらに、その取り組みの中でカリキュラム開発や実践において教師間の同僚性やリーダーシップが発揮されることで、総合的な学習の時間から各教科に活かす教師の学びへと発展していくことが期待できるとしている。一方で、総合的な学習と各教科を関連づけた教師の学びについて明らかにしている研究は多くなされていない。そこで、本研究では保健体育教師に着目し、総合的な学習の時間と教科の学習とが関連して教師の成長へとつながっているかについて明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、保健体育教師が中学校の総合的な学習の時間の授業実践に関わることで、教材理解が深まる可能性について明らかにすることを目的とした。そのために、以下の研究課題を設定して研究を進めることとした。

- ① モデルに設定した中学校の総合的な学習の時間の授業から、実践した学習内容と教科保健体育の学習内容との関連を整理する。そして、保健体育教師の学びの過程を明らかにする。
- ② 従来の、そして、これからの保健体育教師像について、対象とした先行研究を視座として整理する。そして、求められる保健体育教師像を示す。
- ③ ①と②から、中学校の総合的な学習の時間の授業実践から得られた保健体育教師の学びの過程と、求められる保健体育教師像を対比させる。それに基づいて、保健体育教師として教材理解が深まる可能性について言及する。

3. 課題①：総合的な学習の時間と保健体育教師の学び

3.1 研究の方法

総合的な学習の時間は学校ごとに独自のカリキュラムが作成され、実践が行われている。したがって、その授業内容によって教師の学びの過程も多様であること想像できる。ゆえに本研究では、まずモデルとなる総合的な学習の時間のカリキュラムを設定する必要があると考えた。そこで、実験的、先導的な学校教育を行うことが使命とされている国立大学附属学校で、長年にわたり研究開発がなされてきたカリキュラムをモデルとし、保健体育教師の教材理解について、その事例を整理することとした。実際に、広島大学附属福山中学校のカリキュラムをモデルと選定した。このカリキュラムを選定した理由としては、2000年代初頭から文部科学省の研究指定を受け、約20年にわたり改善を加えながら継続して実践されているカリキュラムであることが挙げられる。そこで、実際の授業内容と、その後生徒が設定する探求学習のテーマの内容から、保健体育教師の教材理解の過程を明らかにすることとした。

3.2 モデルカリキュラムと保健体育教師の教材理解

広島大学附属福山中・高等学校(以下、広大附福山中高)(2022)は中学校2年生の総合的な学習の時間で「環境」をテーマに取り上げ、課題発見と課題解決の方策について学ぶことを目的とした授業を実践している。このカリキュラムは中学校から高等学校の6年間を通して学ぶ教科横断的な教科として「現代の視座」という科目を創設し、保健体育科は理科、家庭科と共に中学校2年生の「環境」を担当して構成した授業である(三宅ら, 2012)。そして、その「環境」では「自然環境(外的環境)」と「体内環境(内的環境)」の2つを設定し、環境と人間の生活との関わりについて科学的に探究していく内容となっている(表1)。「自然環境(外的環境)」では、理科の教師が水環境に焦点を当てて、pHや導電率、CODや水中の窒素量といった水に関するデータを測定する方法や技能を身につけながら、科学的な思考のためのデータの信頼性や誤差について、体験を交えながら学習を進めていく(広大附福山中高, 2022)。合わせて、家庭科の教師は「生活を見つめる」という単元で、自分の生活をターゲットとして、身近なところから持続可能な社会のために何ができるのか、どのような行動が求められているのかを科学的な根拠に基づいて意思決定し、実践していく学習を担当している(広大附福山中高, 2022)。そ

して、保健体育教師は「体内環境（内的環境）」の内容を担当し、人間の身体が持つ恒常性や生活習慣との関係について理解を深めるとともに、クリティカルな視点から課題の発見をしたり、科学的根拠に基づきながら課題を解決したりすることができるようにすることを目標として授業を行っている（合田ら、2019）（表2）。具体的な学習内容は、身体が持つ恒常性やライフスタイルとの関係について、総合的・多面的・複合的に理解することを目標に設定している（広大附福山中高、2022）。そして、その目標のもとに日々の食における砂糖や塩の摂取について、また薬と身体の働きの関係性や体温の変化について実際に実験や調査を交えながらデータの収集・分析・整理を行い、それらの関係について考察を深める学習を行なっている。ここに総合的な学習の時間の授業づくりの特徴が見える。実際の授業において砂糖の内容ではいろいろな食べ物の糖度を測定する。また、薬の内容では温度やpH環境下の違いによって薬の溶け方が異なることを測定や実験を行いながら学習を進めていく。このことは総合的な学習の時間は教科書がないがゆえに、現実に見える事象をもとにして総合的・多面的・複合的に理解を進めていく学習であるという特徴を反映している。そして、合田ら（2019）は食についてのテーマにおいて、新たに「味覚」に焦点をあてた学習を取り

入れている。この学習でも、実際に5つの基本味（甘味・塩味・旨味・酸味・苦味）を味わうことや、視覚を遮断して味覚と嗅覚から味の判断をする実験を取り入れている（合田ら、2019）。この学習内容は、実際に生徒が過去に行った課題研究で食べ物の味をどのように判断しているかを探求したことを参考にしにして考案したものである。このことから、保健体育教師が総合的な学習の時間の授業実践を行うことによって教材理解を深め、その後の授業内容を発展させた実際の事例であると言えよう。そして、合田ら（2019）はこの学習内容について、保健分野と総合的な学習の時間とのつながりを示唆するに至っている。同様に、かねてから三宅ら（2012）も総合的な学習の時間の成果を中学校保健分野の発展的学習内容へと還元する試みを行い、保健学習を活性化する授業の在り方について検討をしている。

以上より、モデルと設定した総合的な学習の時間のカリキュラムは、保健体育教師がその授業実践から教材理解を深め、継続的に授業実践を行なっていることがわかる。そして、その学習内容を保健体育科の学習へ関連させ、発展的な学習へつながることを言及している。したがって、これらの事例から総合的な学習の時間の授業実践による保健体育教師の学びの過程が見えてくる。

表1 「環境」のカリキュラム【広大附福山中高（2022）をもとに一部改変】

単元	学習テーマ・内容
0. オリエンテーション	・年間を通してのテーマの提示
1. 身のまわりの環境 （外的環境） 23時間	・外的環境を客観的にとらえる （環境測定、データ処理と分析） ・pHとは（酸性物質の性質） ・電気伝導率とは ・水道水やミネラルウォーターの比較 ・データの見方 （表計算ソフトを使ったデータ分析） ・芦田川水質調査 ・水をテーマとした身の回りの環境を考察する
2. 生活を見つめる 7時間	・生活と環境 ・調理と環境 ・環境に配慮した調理実習 ・調理実習の結果のまとめと発表 ・これからの生活で実行すること
3. 人間の体内環境 （内的環境） 30時間	・生活習慣と内的環境 ・身体の恒常性と生活習慣の関係 ・健康と食について ・砂糖について 糖質の基礎的な性質の理解（食物の糖度測定） 砂糖とどのように関わるか ・塩について 塩分の働きを考える 食事の中の塩分量の計算と考察 ・味覚について 5つの基本味と味覚障害 味覚の不思議（嗅覚との関係、味の感じ方） ・体内時計の働き ・体の仕組みと薬の働き ・体温と恒常性（ホメオスタシス）
4. 課題発見を学ぶ 9時間	・環境に関する課題を発見し、解決策を探る ・まとめと発表

3.3 生徒の探究学習（課題発見を学ぶ）

表1にあるように、「環境」をテーマに総合的な学習の時間の授業が実践されている（廣大附福山中高，2022）。その「環境」では、「自然環境（外的環境）」と「体内環境（内的環境）」の2つにテーマを分け、実験や調査を交えながら科学的に探究する学習を行っている。そしてカリキュラムの終盤では、これまでに学んだことを基にして自ら課題を発見して解決策を探る探究学習が設定されている。これは「課題発見を学ぶ」という単元で、グループ単位でそれぞれテーマを定め、探究活動を行うプログラムである。ここで設定されるグループは年間を通して固定したメンバーとなるように、オリエンテーションであらかじめ指定されている。したがって年間を通して同じメンバーで実験や調査に取り組むこととなり、授業を進めていく中で単元の序盤から互いに“なぜ”という問いを立て、それを共有しながら学習を進めていくことができる。そして、各グループは多くの問いを積み重ねた上で、探究学習に取り組むこととなる。ゆえに、既習内容の問いが既にグループ内で共有され、課題発見のテーマを設定するところから比較的スムーズに学習活動に取り組めると考えられる。

「課題発見を学ぶ」単元では、生徒たちの探究活動を

支援するために、保健体育科と理科、家庭科の教師がアドバイザー的な役割を担う。各グループでテーマが定まったところで、それを「外的環境」と「生活を見つめる」、「内的環境」の3分野に分類する。そして、生徒たちは各教科の教師の専門的な知見を活用しながら、解決策にたどり着くまで探求活動を行う（表3）。実際に教師は、実験道具の準備や実験方法の確認など、各グループが立てた仮説を検証するなどの探究活動の支援を行う。保健体育科と理科、家庭科の教師によって、様々な仮説の検証を行うための場所や道具などを学校内で整備することができる。したがって、生徒たちも多様な発想で仮説の検証をすることができる。

そのような探究学習で、保健体育教師は「内的環境」に分類されるテーマに取り組むグループを対象に解決策を探るための実験や調査について助言を行う（表4）。過去のテーマ事例では、「体内環境（内的環境）」の単元で学習した食と体温の変化の分野に関連した内容が比較的多い。また、体温から派生させて心拍数や血圧などを測定し、内的環境の指標を活用して探究を行う事例も見られる。そこで、生徒たちが設定したテーマと保健体育科で学習する内容との関連に迫った。実際には、表4に挙げられているテーマから、学習指導要領に記載されて

表2 「体内環境（内的環境）」の単元内容【合田ら（2019）をもとに一部改変】

時間	学習内容
1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身体の恒常性と生活習慣との関係を理解する。 ・ 内分泌系、自律神経系、免疫系の協働によって恒常性は維持されていることを理解する。
2~4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 沖縄の過去と現在の平均寿命と食事との関係などから食べることの重要性を認識する。 ・ 食べることの重要性と栄養素の働き、栄養素の消化・吸収・代謝までの流れを理解する。
5~8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 炭水化物（糖質）の基礎的な性質や働きを理解する。 ・ 分蜜糖や含蜜糖などの砂糖に実際に触れ、匂いや味、食感などを味わい、それらの砂糖の違いを理解する。 ・ 果物や野菜、ジュースに含まれている糖度を糖度計で測定することから日常生活での砂糖の摂取量を調べるとともに砂糖とどのように関わっていくのかを考える。 ・ 砂糖を題材とした学習で生じた疑問や興味をもったことについてまとめる。
9~11	<ul style="list-style-type: none"> ・ 塩分の働きと過剰摂取が健康に与える影響について理解する。 ・ 普段食べているものに含まれている食塩量について考える。 ・ 一日の献立から塩分の摂取量を計算し日常の食生活のあり方について考える。
12~15	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食べ物の味を感じることの意義と味の分類について理解する。 ・ 視覚、嗅覚、味覚、触覚など様々な感覚から味を判断していることを理解する。 ・ 味の感じ方の違いや味覚を感じなくなるとどうなるのかを理解する。
16~18	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体内時計の働きから神経系統と健康との関係や眠りのしくみを理解する。 ・ 神経系統、内分泌系、免疫系のしくみについて理解し、身体の恒常性との関係について再確認する。
19~20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 摂取した食べ物が消化・吸収・代謝・排泄されるまでのながれを理解する。 ・ 胃、十二指腸、小腸、大腸、直腸、肝臓、胆のう、膵臓の場所や機能などから体のしくみについての理解を深める。
21~25	<ul style="list-style-type: none"> ・ 薬の起源や薬の働き（主作用や副作用）、薬が吸収されてから排泄されるまでの流れなどについて理解し、薬と体のしくみとの関連について考察する。 ・ 風邪薬や胃薬などの実験から薬が体のしくみにあわせて作られていることを理解する。 ・ 薬を題材とした学習で生じた疑問や興味をもったことについてまとめる。
26~30	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体の機能を働かせて体温を調節するしくみや、体温調節と恒常性の関係について理解する。 ・ 一日の体温の変化と活動ごとの体温の変化について、各自でデータを収集しまとめる。なお、体温の変化については恒常性との関連を考察しながらデータをまとめる。 ・ 各自でまとめたデータをグループ内（5~6人）で発表する。また、グループ内でテーマを決めて、活動ごとの体温の変化について資料を作成しクラス内で発表（発表4分、質疑2分）する。 ・ 体温を題材とした学習で生じた疑問や興味をもったことについてまとめる。

表3 「課題発見を学ぶ」単元のテーマ事例【2022年度授業実施分】

No.	テーマ	概要	分野
1	勉強にかかる時間	シャープペンの芯はどれくらいで使い切れるのか	外的環境
2	液化化現象について	地震による液化化現象のモデル化実験	外的環境
3	再生紙の作成	身近にあるもので丈夫な紙は作れないか	生活をみつめる
4	2つの物を混ぜて何の味	醤油とプリンを混ぜると「ウニ」の味になるなどの実証実験	内的環境
5	洗剤が及ぼす生活用水の影響	洗剤の性質の実験+中和実験	外的環境
6	落葉樹と常緑樹	常緑樹と落葉樹の差異	外的環境
7	果物は位置によって甘さが違うのか	果物の部位によって甘さの違いがあるか	内的環境
8	はかせ鍋の保温性-ぜんざいを添えて-	こしあんとつぶあんの保温性の違い	生活をみつめる
9	地域による川の水質の原因	芦田川の上流と下流の水質の違い	外的環境
10	手を洗う理由	地中にいる細菌を調査(ツルグレン装置)	外的環境
11	持久走の実用性があるかについて	3週間の運動によって体力が向上しているかの検証	内的環境
12	草木染め	自然の染料について天然の繊維と化学繊維で比較実験	生活をみつめる
13	体の様々な部分を温めたり冷やしたりしたときの体温変化	身体の一部を冷却した時の体温変化	内的環境
14	じゃんけんが身体と精神に及ぼす影響	じゃんけんによる罰と報酬で心拍数がどう変化するか	内的環境
15	わさびの辛みを消すには?	ワサビにどの味覚を加えると辛みが消えるかの実証実験	内的環境
16	運動強度と体温の関係	運動強度による体温変化の実証実験	内的環境
17	一番強い味は?	5つの味覚の掛け合わせで残る味覚を実験	内的環境
18	心拍数と色々な動作の関係	音楽のテンポの違いで心拍数がどのように変化するか	内的環境
19	音楽と学習の関係性について	音楽の違いによって計算や思考問題の解答に違いが現れるか	内的環境
20	感情と心拍数の関係	怖い、悲しいなど映像を見て心拍数がどのように変わるか	内的環境
21	色々な地域のpH, 伝導率	地域の水道水の水質の違い	外的環境

表4 「内的環境」に分類されるテーマ事例【2021,2022 年度授業実施分】

No.	テーマ	概要
1	夢について	外的要因と自然に起床した場合の夢の見やすさ 夢の内容
2	血液型と性格の相関関係	「血液型性格診断」はあてはまっているかを検証する
3	頭が芽えるのはどんなときか	どんな状況で人は一番頭を動かせることができるのか
4	行動と体の関係	行動の前後で血圧がどのように変化するか
5	視覚と色	効果的な色の使い方 色覚異常の人のために社会はどのような色が使われているのか
6	身につけるものと体温、皮膚温度の関係	どんなものが一番体温や皮膚温度を上げて保つことができるのか
7	音楽と人体の関係について	音楽を聴くことと人間のリラクゼーションにはどのような関係があるのか
8	2つの物を混ぜて何の味	醤油とプリンを混ぜると「ウニ」の味になるなどの実証実験
9	果物は位置によって甘さが違うのか	果物の部位によって甘さの違いがあるか
10	持久走の実用性があるかについて	3週間の運動によって体力が向上しているかの検証
11	体の様々な部分を温めたり冷やしたりしたときの体温変化	身体の一部を冷却した時の体温変化
12	じゃんけんが身体と精神に及ぼす影響	じゃんけんによる罰と報酬で心拍数がどう変化するか
13	わさびの辛みを消すには?	ワサビにどの味覚を加えると辛みが消えるかの実証実験
14	運動強度と体温の関係	運動強度による体温変化の実証実験
15	一番強い味は?	5つの味覚の掛け合わせで残る味覚を実験
16	心拍数と色々な動作の関係	音楽のテンポの違いで心拍数がどのように変化するか
17	音楽と学習の関係性について	音楽の違いによって計算や思考問題の解答に違いが現れるか
18	感情と心拍数の関係	怖い、悲しいなど映像を見て心拍数がどのように変わるか

いる保健体育科の学習内容のどの項目に当てはまるかについて分類を試みた。分類するにあたり、モデルとした総合的な学習の時間の授業を実際に担当した保健体育教師2名と保健体育科教育を専門とする大学教員1名の合計3名によって協議を行い、合意を図ることとした(表5)。その結果、保健体育科で学習する6項目の内容が抽出された(表6)。もっとも多かった項目は生活習慣と健康に関する項目であった。これについては、「体内環境(内的環境)」の単元では主に食についての学習が取り上げられていたので、その食から視野を拡げて休養や運動の課題へと目が向けられたことがうかがえる。続いて多かった項目は、身体環境についての課題であった。これについては、総合的な学習の時間の単元で体温の変化を取り上げたことに関連していることが関連しているとうかがえる。以上に加えて、精神機能の発達や心の健康についての課題設定が見られた。これは体温や心

拍数、血圧などの変化は体と心の両面が影響していると気づき、探究学習のテーマにしていると考えられる。ゆえに保健分野で取り扱う心身相関についての内容と関連があることがわかる。さらに保健分野にとどまらず、体育分野との関連も見られる。主に保健分野における生活習慣と健康の項目の運動に関する内容から拡げ、体育分野における体づくり運動や体育理論の領域の学習との関連がうかがえる。このように、総合的な学習の時間の学習内容と保健体育の学習内容の関連性を見ることができるとして、保健体育から総合的な学習の時間へつなげる意味では総合的・多面的・複合的な理解が進むことが考えられる。反対に、総合的な学習の時間から保健体育では、発展的な学習へ授業構成を改善できることが考えられる。そして、それらが相互に往還するところに保健体育教師の学びの過程を見ることができるとして、

保健体育教師が総合的な学習の時間の教材研究から学ぶこと：中学校で「環境」を主題とした教材と保健体育教師像の対比から

表5 「内的環境」に分類されたテーマと保健体育科の内容との関連

No.	テーマ	保健体育の学習内容との関連
1	夢について	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康
2	血液型と性格の相関関係	心身の機能の発達と心の健康 (ウ) 精神機能の発達と自己形成
3	頭がびえるのはどんなときか	健康と環境 (ア) 身体の状態に対する適応能力・至適範囲
4	行動と体の関係	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康 ※体づくり運動 (イ) 体の動きを高める運動 ※体育理論 (2) 運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方
5	視覚と色	健康と環境 (ア) 身体の状態に対する適応能力・至適範囲
6	身につけるものと体温・皮膚温度の関係	健康と環境 (ア) 身体の状態に対する適応能力・至適範囲
7	音楽と人体の関係について	心身の機能の発達と心の健康 (エ) 欲求やストレスへの対処と心の健康
8	2つの物を混ぜて何の味	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康
9	果物は位置によって甘さが違うのか	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康
10	持久走の実用性があるかについて	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康 ※体づくり運動 (イ) 体の動きを高める運動 ※体育理論 (2) 運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方
11	体の様々な部分を温めたり冷やしたりしたときの体温変化	健康と環境 (ア) 身体の状態に対する適応能力・至適範囲
12	じゃんけんが身体と精神に及ぼす影響	心身の機能の発達と心の健康 (エ) 欲求やストレスへの対処と心の健康
13	わさびの辛みを消すには？	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康
14	運動強度と体温の関係	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康 ※体づくり運動 (イ) 体の動きを高める運動 ※体育理論 (2) 運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方
15	一番強い味は？	健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康
16	心拍数と色々な動作の関係	心身の機能の発達と心の健康 (ウ) 精神機能の発達と自己形成
17	音楽と学習の関係性について	心身の機能の発達と心の健康 (ウ) 精神機能の発達と自己形成
18	感情と心拍数の関係	心身の機能の発達と心の健康 (エ) 欲求やストレスへの対処と心の健康

※は体育分野の内容を示す。

表6 保健体育の学習内容の分類 (表5より)

保健体育の学習内容	分類数
健康な生活と疾病の予防 (イ) 生活習慣と健康	9
健康と環境 (ア) 身体の状態に対する適応能力・至適範囲	4
心身の機能の発達と心の健康 (ウ) 精神機能の発達と自己形成	3
心身の機能の発達と心の健康 (エ) 欲求やストレスへの対処と心の健康	3
※体づくり運動 (イ) 体の動きを高める運動	3
※体育理論 (2) 運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方	3

※は体育分野の内容を示す。

3.4 総合的な学習の時間から見える

保健体育教師の学びの過程

今回のモデルカリキュラムは「環境」をテーマに取り上げ、課題発見と課題解決の方策について学ぶことを目的とした授業である。その中で保健体育教師は「体内環境 (内的環境)」について担当し、人間の身体が持つ恒常性や生活習慣との関係について理解を深める内容を取り扱い実践する。その後、「課題発見を学ぶ」単元で、生徒たちの探究学習の支援を行う。ここでも保健体育教師は「体内環境 (内的環境)」に関連するテーマについて支援を行う。そして、これまでに生徒が設定したテーマの事例から、保健体育の学習内容の6つの項目との関連があると考えられた。その学習内容は主に生活習慣と健康に関する内容が多く、続いて身体の状態についての内容であった。特に生活習慣と健康の内容では保健分野にとどまらず、体育分野の体づくり運動や体育理論との関連も考えられた。さらに、精神機能の発達や心の健康の課題の内容の中では、保健分野で取り扱う心身関連の内容との関連も考えられた。

総合的な学習の時間は教科書がないがゆえに、現実に見える事象をもとにして総合的・多面的・複合的に理解を進めていくところに特徴がある。そして、現場の教

師は独創性を発揮したカリキュラムを作成し、実践することが求められている。今回のモデルカリキュラムは保健体育教師がその授業実践による教材理解から改善を加え、継続的に実践されている。そして、それらの学習内容を保健体育科の学習へと関連させ、保健体育の発展的な学習となる可能性を示唆している。以上から、保健体育教師の学びの過程として、保健体育から総合的な学習の時間へは総合的・多面的・複合的な理解が考えられる。反対に、総合的な学習の時間から保健体育へは、発展的な学習へ授業構成を改善することが考えられる。そして、それらが相互に往還して保健体育教師の学びの過程となっていると示唆することができる。(図1)。

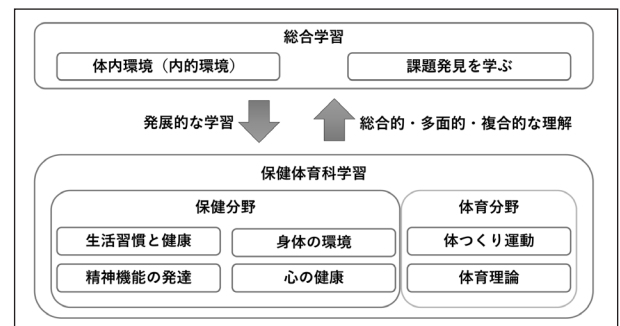


図1 保健体育科教師の学びの過程

4. 課題②：保健体育教師像

4.1 研究の方法

保健体育教師像は時代とともに変化している。それは、学習指導要領が約10年ごとに改訂されることによって、求められる保健体育教師像も変化を重ねていると考える

こともできよう。そこで、本稿ではこれまでと今、そして、これからの保健体育教師像について先行研究をもとにして整理することで、課題①で明らかにした総合的な学習の時間による保健体育教師の学びの過程と対比させるための特徴的な要素を抽出する。そのために、保健体育教師像の論考が掲載されている以下の文献を対象文献として整理をすることとした。

- (1) 体育科教育 第66巻 第3号「特集 アクティブ・ラーニング時代の体育教師像」, 2018年3月1日発行, 大修館書店
- (2) 体育科教育 第70巻 第3号「特集 新たな体育教師の学びの姿」, 2022年3月1日発行, 大修館書店

以上を対象とした理由は、体育科教育に関する歴史ある専門誌であり、時事の教育課題や関心事に沿って毎月その内容を構成している文献であるからである。また、対象の2つの文献は、2017年から2018年に小・中・高等学校の学習指導要領が改訂された後に発信された論考である。したがって、この2つの文献によって求められる保健体育教師像の特徴的な要素が抽出できると判断した。

4.2 今日までの保健体育教師像

これまでの保健体育教師像を明らかにしていくために、まず保健体育教育の目的や方法についての制度上の変遷の視点から見ていきたい。西原(2018)は体育授業について、「身体の教育」としての体育から「スポーツによる教育」としての体育、そして「スポーツの教育」としての体育と、その目的の移り変わりを整理している。そして、今日の体育授業は、国力の復興に必要とされた身体の規律訓練や産業社会における全人形成のための体育から、スポーツを他に還元することなく「それ自体を楽しむ」ことが目的となったとしている。以上からは、過去の国を取り巻く社会情勢やそれに対して取られてきた政策などが背景となって、保健体育授業の目的やその方法が変化したことがわかる。すなわち、時代とともに保健体育に関わる様々な制度が変化したことで、求められる保健体育教師像も少なからず変化した経緯が見えてくる。つまり、これまでの保健体育教師はスポーツを手段として規律や全人形成といった気力や体力、社会性などを育むといった人間形成を目的とした授業実践を行うことが求められていた。しかし、現在ではスポーツ

そのものの価値を伝え、その楽しさを理解させることを目的とした授業実践へと変化したと言える。これによって保健体育教師は、時には厳しさを伴うような授業ではなく、子どもたちが主体的に学習に取り組む姿勢を持つような授業を行うことが求められるようになったと考えられる。すなわち、トップダウン型からボトムアップ型へと授業実践を変化させる保健体育教師像があると言える。

続いて、学校現場の視点から保健体育教師像を見ていきたい。成家(2022)は教師行動、そしてその土台となっている教師の指導観、さらにそれらの土台となっている基本的な前提認識の3つの段階を示し、組織文化であると示している。そして、それぞれが往還的に影響を及ぼし合って保健体育教師の指導観が強化されているとしている。以上からは、保健体育教師像はある学校組織に所属する中での組織文化という、同調圧力のようなもので強化されている側面があることがわかる。例えば、所属する学校組織の先輩教師から、体育授業の最初には準備運動として必ずラジオ体操を行うことが伝えられ、それに取り組むうちに当たり前となり、後に後輩教師へと伝えられていくといった事例が想像できる。したがって、教師は所属する学校の組織文化の影響を受けて異なる教師像となることが推察される。ゆえに、よりよい指導観の形成をめざすならば、無意識のレベルで染まっている組織文化に目を向け、心理的な安全な状態の中で、新たな考え方を吸収し、これまでのやり方に疑問を呈すことが求められる(成家, 2022)。一方で、朝倉(2018)は体育教師の在り方について「信念」に着目した論考を発表している。ここで言う「信念」とは、「教師が経験をもとに形成した個人的なものの見方・考え方」であると定義している。したがって、学校現場で保健体育教師が持つ「信念」とは、所属する学校の組織文化の中で経験したことから形成されていると考えられる。ゆえに、所属する学校が異なる個々の教師によって組織文化は異なり、教師によって持つ「信念」は異なると言える。そこで、朝倉(2018)は、教師に必要なのは改善と改革に対する柔軟さと、不確実な実践を支える強さを兼ね備えた「しなやかな信念」であると主張している。また、「しなやかな信念」を持つために、戦後の体育科教育を牽引してきた実践家や研究者は「何のために教えるか」を深く問い、その上に授業論を形成してきた歴史があるがゆえに、先人の授業論に触れる必要性を示している。以上をまとめると、保健体育教師は学校現場でこれまで当たり前だと考えられてきたことに疑問を持ち、新しい

考えを積極的に吸収することが求められると言えよう。そのためにも、先人の考えに触れるとともに柔軟な考えと強い意志を持って変化に対応する力を持つことが大切である。これらから言えることは、保健体育科教育にイノベーションを起こすことが、求められる教師像であると考えられる。

4.3 これからの保健体育教師像

日々刻々と変化する社会の中で、学校教育に求められることも変化を続けている。それを反映するような形で学習指導要領は約10年の間隔で改訂され、現場の教師にその時々課題に沿った目標や内容についての指針を示している。このような変化を経てきた中で、これからの保健体育教師像を考えていきたい。現行の学習指導要領は2017年に小学校が改訂され、その後に中学校、高校と順次改訂された。改訂の主な内容では、何ができるようになるのかと、どのように学ぶのかを明確に示している。そして、何ができるようになるかについては、知識・技能、思考力・判断力・表現力など、学びに向かう姿勢・人間性などという3つの柱で整理をしている。そして、どのように学ぶかについては、主体的で対話的な深い学びを実現することが示されている。さらに、何を学ぶかだけでなく、どのように学ぶかも重視して授業改善をしていくことが求められている。以上の改訂の指針を具体的に実践していくことが、まずこれからの保健体育教師に求められていることである。

これからの保健体育教師像について西原(2018)は、より深く教材を理解する力や子どもの実態を見取る力を備えることが必要であるとしている。また、梅野(2018)は、子ども一人ひとりの差異を個性として認めて子どもの学びを信じることを基盤として、みんなをうまくさせ、〈わかるーできる〉を子どもたち自身で統一させ、さらに子どもの思いや考えを常に考える体育教師が求められる教師像であると示している。以上のことから、教材理解と生徒理解の双方を深める保健体育教師像が見えてくる。一方で、2020年初めから新型コロナウイルス感染症拡大が始まり、学校教育も様々な場面で制限を受け、翻弄されてきた。そして、これまでコロナ禍の約3年間で学校教育の内容や方法に様々な変化が生まれたことも確かである。それがゆえに、新たな試みも数多くなされたことも確かである。そこで、岩田(2022)はグローバル化やコロナ禍に伴い、教師たちは子どもたちの多様な背景を配慮して格差を生まない、拓げないための力

量が求められていると述べている。そして、社会正義を学ぶことで多様な背景を持つ子どもの教育の公平性を保つだけではなく、すべての教師へ「変革」や「挑戦」の視点を与えていることを示唆している。また、保健体育教師特有の仕草や指導方法は、意図しないところで学習者に影響を与えることが多く、よりよい状態に変革していく動きとして社会正義の視点が求められると述べている。以上からは、新たな学問的な視点から課題を見つめてよりよい方向へ変革することが、求められる保健体育教師像として見えてくる。

以上より、これからの保健体育教師像は以下のようにまとめることができよう。まず、教材理解と生徒理解の双方を深める教師である。特に、一人一人の子どもに適した学習となる生徒理解とそれに対応できる教材理解が求められると言えよう。加えて、その教材理解と生徒理解を支えるために新たな学問的な視点を持ち、より良い方向に変革することが求められる保健体育教師像が見えてくる。

4.4 求められる保健体育教師像

これまで整理をしてきたことから、求められる保健体育教師像については以下のように考えることができる。

初めに、保健体育教師は子どもたちが主体的に学習に取り組む姿勢を持つような授業を行うために、ボトムアップ型の授業実践が求められている。また、先人の考えに触れるとともに柔軟な考えと強い意志を持って変化に対応し、保健体育科教育にイノベーションを起こすことが求められる。また、これからは教材理解とあわせて生徒理解の両方を深める必要があり、そのために新たな学問的な視点を持ち、より良い方向へ変革することが求められている。すなわち“温故知新”という言葉があるように、これまでの保健体育を学び、さらにこれからのよりよい保健体育教育を想像することができる「学び続ける保健体育教師」という教師像であると言える(図2)。

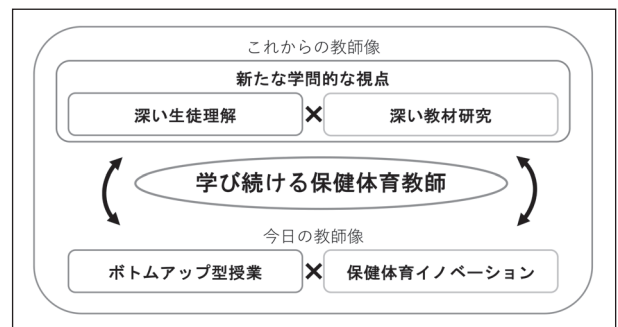


図2 求められる保健体育教師像

5. 課題③：保健体育教師が教材理解を深める可能性

5.1 考察の視点

教師が成長するためには多くを学ぶ必要がある。また、現場の教師となっても学び続けなければならない。そして、体育教師の資質能力の向上は、個々の体育教師が経験から学び、成長していく過程の中に見出される（朝倉・清水，2014）。そこで保健体育教師の経験による学びからの成長の過程を、信念の変容ととらえて考えていきたい。朝倉・清水（2011）によると、信念とはある対象と対象との連結とその強さを問題とする概念であり、具体的な信念は実践現場の教師間で共有されやすい。一方で、現場に固有の信念は行為主体が持つ多元的目標の表層的な統合に寄与する一方で、彼らの価値観に関わる信念を個人に帰属したままにし、ひいては参加目的間のコンフリクトを潜在化させる機能を持つとしている。つまり、保健体育教師の学びは経験によってその信念が変容することであると考えられ、合わせて教師間でそれぞれの信念は共有する必要性はあるものの、個々の教師の価値観によって対立することもありうると考えられる。そこで、朝倉・清水（2014）は体育教師の信念の特徴を調査し、成長には「支援者型」と「開放的信念型」の信念が重要であると示唆している。また、成長経験を受け入れることについては「開放的信念型」であれば積極的に受容するとして、特に「公共的価値の重視」、「先導的実践の追求」、「研究志向」の信念がその成長経験の受容を促すとしている。そこで、これまで明らかにしてきた中学校における総合的な学習の時間の授業実践による保健体育教師の学びの過程と、対象文献より整理した求められる保健体育教師像を対比させる考察の視点として、信念の概念（朝倉・清水，2014）を援用していくこととする。

5.2 保健体育教師における教材理解の成長

モデルとした総合的な学習の時間による保健体育教師の学びの過程と、対象の文献から求められる保健体育教師像の2つを対比させ、信念概念の項目を当てはめ、成長の可能性について言及していく（図3）。まず、総合的な学習の時間による保健体育教師の学びの過程では、「先導的実践の追求」の信念が変容する可能性が考えられる。保健体育教師は教科の授業に加えて総合的な学習の時間を実践することで、相互の授業で新たな取り組みを行うことができる。それは、総合的な学習の時間は学校ごとに独自のカリキュラムを作成し、現実に見える事

象をもとにして総合的・多面的・複合的に理解を進めていくという特徴があるため、これまででない授業実践に取り組むことが可能であるからである。ゆえに保健体育教師は、総合的な学習の時間を通して総合的・多面的・複合的な理解が進む。そして、それらが教科の発展的な学習としての授業改善へとつながると考えられる。さらに、それらの学びの過程が相互に往還することで「先導的実践の追求」の信念が変容して成長となると考えられる。

続いて、求められる保健体育教師像について信念の概念から考えていきたい。学び続ける保健体育教師として教材理解と生徒理解の両方を深め、新たな学問的な視点を持ってより良い方向へ変革することが求められているとした。そこで、まず考えられるのが「研究志向」の信念の変容による成長である。保健体育科教育にイノベーションを起こし、革新的な取り組みを実践するためにもこの信念の成長は必要と言える。また、もう1つ考えられるのが「生徒重視」の信念の変容による成長である。朝倉・清水（2014）によると、若手の体育教師には生徒重視型の信念を持つ教師の割合が多い傾向にあるとしている。そして、教師の経験年数と相対的に「公共的価値の重視」、「先導的実践の追求」、「生徒重視」は全ての成長経験の受容に対して有意な正の影響力を有していると報告している。ここで若手教師の「生徒重視」とベテラン教師の「生徒重視」の信念は異なり、この変容に成長の過程を見ることができると指摘したい。先に考察の視点として示した成長経験の受け入れについて、「公共的価値の重視」の信念がその受容を促すと示唆されている。ここで言う「公共的価値の重視」とは、朝倉・清水（2014）によると体育教師としての仕事に関わる公共的な価値を志向する信念である。一方で「生徒重視」の信念とは仕事において生徒を重視する信念としている。ゆえに、ここで示す「生徒重視」の信念とは、保健体育教師が社会で価値ある職業であるといった肯定的な態度を基底とし、その上に生徒から学ぶ姿勢であると解釈できる。それは生徒が主体的に学び、ボトムアップ型の授業を教師が実践することによって生徒から学ぶ姿勢であると考えられる。以上のような「生徒重視」の信念の変容が保健体育教師の成長の過程となると言える。

また、以上で取り上げた信念の中心軸となっているのが、「支援者型」と「開放的信念型」の信念であると言える。それは、モデルとした総合的な学習の時間による保健体育教師の学びの過程での、探究学習から説明す

ることができる。授業で教師は生徒たちが立てた仮説を検証する探究活動の支援を行う。そこで保健体育教師はその学びの過程から授業改善を行っている。さらに、それらの学習内容を教科の学習へ関連させ、保健体育の発展的な学習へとつなげる可能性を示唆している。授業をとおして生徒の学びを支援しながら、新しい学びを積極的に受け入れる信念が教師の成長の中心軸をなしていると言えよう。

最後に、信念の概念によって保健体育教師の成長の可能性をまとめていく。はじめに「支援者型」と「開放的信念型」の信念の変容が保健体育教師の成長の可能性の中心軸である。それに加えて、求められる保健体育教師像から「研究志向」と「生徒重視」の信念の変容が成長の可能性と考えられる。さらに、保健体育教師の総合的な学習の時間による学びの過程から「先導的実践の追求」の信念の変容による成長の可能性が見えてくる。これらから、学び続ける保健体育教師像からは理論的な学びが、一方で総合的な学習の時間による保健体育教師の学びの過程からは実践的な学びがあると考えられる。ゆえに、保健体育教師が総合的な学習の時間を実践することで、その教材研究から理論と実践を往還させ、学び続けて教材理解を深める過程の具体的なイメージを明らかにすることができた。

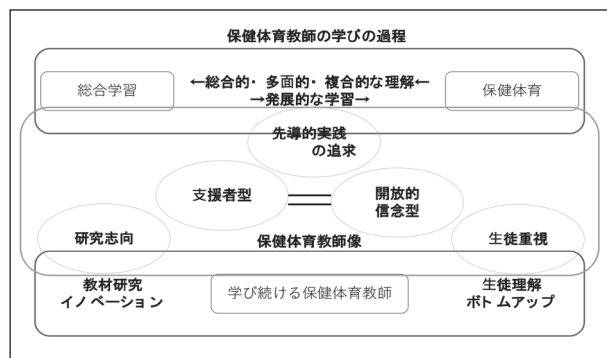


図3 信念から見る保健体育教師の成長の可能性

6. まとめ

本研究は、保健体育教師が中学校の総合的な学習の時間の授業実践に関わることで、教材理解が深まる可能性について明らかにすることを目的とした。

はじめに、モデルとして設定した中学校の総合的な学習の時間の授業から、実践した保健体育教師が学んだ内容と教科の学習内容と関連について整理し、保健体育教師の学びの過程を見出した。その結果、保健体育から総合的な学習の時間へつなげる意味では総合的・多面的・

複合的な理解が進むことが考えられた。反対に、総合的な学習の時間から保健体育では、発展的な学習へ授業構成を改善できることが考えられた。そして、それらが相互に往還することが保健体育教師の学びの過程であることを明らかにすることができた。

次に求められる保健体育教師像について、対象とした先行研究を視座として整理した。そこから、ボトムアップ型の授業実践と保健体育科教育にイノベーションを起こすことが求められる教師像であるとわかった。また、これからの保健体育教師は教材理解とあわせて生徒理解の両方を深めていく必要があり、新たな学問的な視点を持ってより良い方向へ変革することが求められていることから、「学び続ける保健体育教師」という教師像が見えた。

最後に、モデルとした中学校の総合的な学習の時間による保健体育教師の学びの過程と、対象文献から明らかにした求められる保健体育教師像を対比させ、保健体育教師の成長の可能性に迫った。考察の視点としては、信念の概念(朝倉・清水, 2014)を援用した。まず中心軸には「支援者型」と「開放的信念型」の信念があると考えられた。そして、求められる保健体育教師像からは「研究志向」と「生徒重視」の信念の変容が成長の可能性であると考えられた。また、保健体育教師の総合的な学習の時間による学びの過程から「先導的実践の追求」の信念の変容による成長の可能性が考えられた。ゆえに2つの対比からは理論的な学びと実践的な学びが見えた。そして、保健体育教師が総合的な学習の時間を実践することで、教材理解を深めるために学び続ける過程の具体的なイメージを明らかにすることができた。

本研究では保健体育教師が総合的な学習の時間の教材研究から学ぶことについて、総合的な時間のカリキュラムと保健体育教師像の対比によって明らかにしてきた。ゆえに、授業実践を行った保健体育教師自身が実際にどのような教材研究を行い、教材理解を深めたかについての言及はしていない。したがって、今後は授業実践を行なった教師自身を対象に、現実は何を学び、成長することができたかについて調査を行う必要があると考える。それを行うことによって、総合的な時間のカリキュラムの妥当性が見え、その改善点も示すことができるだろう。一方の求められる保健体育教師像では、現場の教師に適しているものであるかが示唆できるものとする。

7. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2022) 今, 求められる力を高める総合的な学習の時間の展開, アイフィス
- 2) 大友照典 (2019) 総合的な学習の時間の指導法について—学習指導要領の改訂を受けて—, 国土館大学体育研究所報 38 巻 pp.107-109
- 3) 中央教育審議会 (2022) 『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と, 多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～ (答申)
- 4) 中央教育審議会 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申)
- 5) 川村光 (2007) 教師に求められる新たな役割—「総合的な学習の時間」の実践の成功と関わって—, 日本教師教育学会年報 16 巻 pp.109-118
- 6) 木原俊行ほか (2005) カリキュラム・コーディネーター養成のための e-Learning プログラムの開発研究, 教育学論集 31 巻 pp.1-10
- 7) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示), 東山書房
- 8) 三宅幸信ほか (2012) 中学校保健分野の発展的学習内容構成についての試み—「身体の内的環境」に関するひとつの構成—, 広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要 52 巻 pp.279-288
- 9) 合田大輔 (2019) 味覚の不思議—保健分野での発展的学習を見据えて—, 広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要 59 巻 pp.200-211
- 10) 広島大学附属福山中・高等学校 (2023) 研究開発実施報告 取り組みの具体とカリキュラム開発 (年間計画)と各種取り組みの報告書, 広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要 63 巻 pp.62-66
- 11) 西原康行 (2018) 体育教師像の変遷—その歴史に学ぶ, 大修館書店 体育科教育第 66 巻第 3 号 pp.16-19
- 12) 成家篤史 (2022) 組織文化としての体育の指導観, 大修館書店 体育科教育第 70 巻第 3 号 pp.16-19
- 13) 朝倉雅史 (2018) 不確実な実践に挑む「しなやかな信念」を持った教師を目指して, 大修館書店 体育科教育第 66 巻第 3 号 pp.28-32
- 14) 梅野圭史 (2018) アクティブ・ラーニング時代に求められる体育教師の資質・能力とは, 大修館書店 体育科教育第 66 巻第 3 号 pp.20-23
- 15) 岩田昌太郎・大城穂乃香 (2022) 保健体育教師の社会正義入門, 大修館書店 体育科教育第 70 巻第 3 号 pp.30-33
- 16) 朝倉雅史・清水紀宏 (2011) 体育教師の信念に関するエスノグラフィー研究, 体育・スポーツ経営学研究 24 巻 pp.25-46
- 17) 朝倉雅史・清水紀宏 (2014) 体育教師の信念が経験と成長に及ぼす影響—「教師イメージ」と「仕事の信念」の構造と機能—, 体育学研究 59 巻 pp.29-51

What Health and PE Teachers Can Learn from Researching Teaching Materials for the Period for Integrated Studies

— From the Contrast Between Teaching Materials on a Subject of “Environment”
in Junior High School and the Image of Health and Physical Education Teachers —

Naonori Abe¹⁾ • Daisuke Gouda²⁾ • Hiroshi Matsuda¹⁾

1) Department of Sports and Health Science, Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

2) Fukuyama Junior and Senior High School Attached to Hiroshima University

E-mail : nafeb24@heisei-u.ac.jp

Abstract

This study aimed to clarify the possibility for physical education (PE) teachers to deepen their understanding of teaching materials through their involvement during integrated studies at junior high schools.

The connecting health and PE to integrated studies can promote a comprehensive, multifaceted, and multimodal understanding of the material. Conversely, it is possible to improve the structure of classes from integrated studies to health and PE. The learning process of the PE teacher can be seen in the reciprocal exchange between these two aspects. In terms of the image of the required PE teacher, the teacher should have a bottom-up teaching approach and innovation in health and PE. The teachers would also be required to deepen both their understanding of teaching materials and their students, and to improve with a new academic perspective. Regarding the possibility of PE teachers deepening their understanding of teaching materials, the concept of belief (Asakura and Shimizu, 2014) was used as a perspective for consideration. As a result, the PE teachers practiced the integrated learning time and were able to move between theory and practice after studying the teaching material. Additionally, we clarified a concrete image of a deeper understanding of the teaching materials in the process of continuing to learn.

KEYWORDS: Health and Physical Education, The Period for Integrated Studies, Teacher Image, Researching Teaching Material

